

インターネット公開許諾のない文章には
墨消し処理を施しています。

日本浄土教の三階段

佐藤 密雄

尺尊八相成道の炬火菩提樹下に燃え全世界に光明を投じてより三千年又我れ眞實の利説いて群盲を救はんと大無量壽經に説破せられ彌陀界眞實の妙法を現はされ爾來三國の傳燈烈祖此れを護持し玉ひ我が日東の聖者源空上人其の甘露を一文不辨の凡夫に灌ぎ玉ひてこゝに七百年其の間又風雨雪其の眞實に異りなしと雖も其の外殼の風光自ら變易なしとせず今頑魯之者其の跡を

訪ねて天台、横川、吉水三聖の念に一筆なさん
とす。

抑も我日東淨土教の後を訪ぬれば遠く佛教渡來
に逆るとも雖其の組織的發達を論せばこれを天
台に源すと言はざるべからず。

それ叡岳は日本佛教の發祥地たりと言ふべく少
なく共我國現下の佛教は悉くこれを叡岳に發し
たりとも云ふも又過言なりと誰か言はん。我善
導流も實に一大の孝僧慈覺大師承和五年入唐し
玉ひ五台山に念佛三昧の法を傳へられ歸朝仁壽
元年叡山常行堂に念佛三昧を行ひ玉ひしに其の
起源を置くものなり。然して其の後法然上人に
至る發達の後を見て恵心僧都を過渡期として三
つの階段を追ふて論せんとするのである。

先づ最初に天台の念佛たるがこの念佛たるや其
の修大行四種三昧の隨一常行三昧と云はるゝ念
佛三昧である、然してこの修大行たるや發大心
三——方言(一)簡非(十)顯是(三二)と相應じて車
の兩輪たるべき物である摩訶止觀見聞添註卷第
二を見れば月山寺尊舜は談じて曰く

問第二修大行者云何、曰上發大心發三千圓融
菩提心。故今修三千大行。名曰修大行。止

云^二之^一夫欲登妙位非行不楷已上非修
行無^レ至果位故立。然非^三上發大心外別有^二
修行。云云。(佛全29一二九上一行)

これに依つてこれを見れば實に修大行の地位は
自ら明らかなるが如く而してこの修大行第
二位に擧げらるゝ此の常行念佛三昧も亦其地位
自ら明白ならん、然らばこの所謂常行念佛三昧
の如何を同書に依りて見ればこれを論じて曰く
年二常行三昧者以般舟三昧經而爲所依。

九十日爲二期。阿彌陀佛爲本尊單讀小阿
彌陀經。專住念佛三昧一行。故名常行三昧。
云云。(佛全29一二六下終六)

然して右の月山寺尊舜の見聞の文に對して龍増
寺高觀添註して曰く

讀阿彌陀經者。今文不云此旨。雖^レ然言^二
但專爲彌陀爲三法門主。故依^レ義加^レ之。今世行^二
此三昧。皆用慈覺大師自^レ法道和尙^レ所^レ相傳^一
引聲彌陀經上委旨在常行三昧式。(同上)

文に明らかなるが如く後世の我宗別時念佛と形式に於いて同じきを見るのである、阿彌陀佛を本尊となす所に經を讀む點實に淨土往生念佛なるに似たり更に止觀見聞は於此有ニ方法勸修二文段。方法者。開遮口說嘿。意止觀身開四威儀中行一誠ニ往坐臥。と云ひ、口說嘿とは九十日間彌陀を口唱して他事を交へざる事にして其の相狀は

九十日心常念ニ阿彌陀佛ニ無ニ休息ニ或唱念俱進或先念後唱。或先唱後念唱念相繼無ニ休息時一若唱ニ彌陀ニ即是唱ニ十方佛ニ巧德等。但專以ニ彌陀ニ爲ニ法門主ニ擧レ要言レ之歩々聲々念々唯在ニ阿彌陀佛云云。(佛全29一三七上)

更意止觀は意に彌陀を信するなりとて添註して曰く

念ニ西方阿彌陀佛ニ去レ此十萬億佛刹。在ニ寶地寶池寶樹寶堂衆菩薩中央一坐說レ經。三月常念レ佛云何念。三十二相從ニ足下千輻輪相一一逆緣念ニ諸相乃至無見頂亦應下從ニ頂相ニ順緣乃至千輻輪上令ニ我亦逮ニ是相ニ云云。(同上)

これに依つてこれを見れば念唱とあるより念は正しく觀念の念なる事は明了なり全文其の觀念を主とせるはこれ又明了なる如くなれ共此形式のみ常行三昧は止觀なり故に止觀見聞は一家の相傳を述べ

常行口傳云何答常行三昧者。實非ニ必對ニ往坐臥一法界ノ寂照ノ止觀顯レ我等衆生本來行ニ止觀ニ謂ニ之常行ニ止觀外無ニ余法ニ號ニ之三昧。

更に歩々聲々念々唯在彌陀について曰く

先德口傳云歩々聲々等者。除ニ一句ニ加ニ一句ニ已上言除阿彌陀佛一句。加ニ止觀明靜一句也。法界寂照ノ止觀顯レ行者ノ三業四威儀。併是三諦三觀妙行也。是云ニ止觀明靜二名ニ阿彌陀佛。止觀即是彌陀故也。(佛全29一二七上下)

實に天台の念佛たるや觀念にして觀念にあらず。即ち佛の相好を觀じて即空即假即中の觀を凝すものなり故に三諦三觀の妙行なりと云へるものにして彌陀即止觀の實相理觀の念佛である然れ共この念佛がやがて其の觀念の方面のみ重きを置かれて理觀の漸く離れ來りしものが所謂

惠心の第二次の念佛である。

吾人は第二次の階段として横川慧心院權少僧都源信大和尚の念佛を見出すのである。僧都は第三時稱名の確立者源空和尚以前二百年の人にして其念佛思想は其師元三大師慈惠大僧正が淨土を求め且つ九品義なる著まで著されあるが故に其影響あるは勿論なりと雖も其の根的なる原因は正しく常行三昧にあり、然して師の念佛たるや中間過渡期にあるが故に自ら三期を有するものなり即ち師の最初の念佛は天台理觀であり其最後の念佛は稱名にかたむける者にして中間に入る觀念の念佛は最も師の多くを占むるものである。

即ち惠心僧都最初の念佛は實に天台より出でた念佛なり彌陀觀心集る小品の最初に

咒者即空之義也。彌者隨緣十界也即假之義也

恒順三百界。陀者中道也則法身也。故云。(惠心全集二258下)

と云ひて三諦三觀の妙行なりてふ天台そのまゝの思想と見るべきである更に正修觀記卷中に於

又觀彌陀名字體用一阿字ハ無^ナ故諸法空寂彌字ハ量^ナ故萬像森然。陀字壽^ナ故中道實相。此三諦中攝^ニ一切法。是故佛音ハ以^ニ三諦^ニ攝^ニ一切法^ニ不出^ニ三諦^ニ。已上。(惠心全集二263下)

いてなりと云ふに至つて彌陀即三諦なりと云ふ説を最も明かに裏書して居るのである。

然してこゝ考ふべきは惠心僧都に到りて彌陀の地位非常、高められ居る事である、即ち天台本來の阿彌陀佛觀は先に引きたる如く「若唱彌陀即是唱十方佛巧德等」と云ふが如く全く十方諸佛も彌陀も同一であつて天台大師の摩訶止觀及觀經疏に明了である、然るに惠心僧都の阿陀佛觀は正修觀記卷中題號の下に「附彌陀攝八宗」と云ふが如く又

當レ知彌陀名號三字具備^下二千三百九十五卷大乘經乃至(中畧)五百九十三卷賢集法門亦具一金剛界一千四百五尊胎藏界五百三尊蘇悉地七十三尊故唱阿彌陀三字即唱一万三百二十四卷一切聖教。亦唱一千九百八十一體一切聖衆。

と云ひて阿陀佛を以てすべての佛の上に見て更に

念_二阿字_一時即滅_二四十二品無明同體見思煩惱_一
 成_二報身佛_一。念_二彌字_一時即滅_二四十二塵勞煩惱_一
 三土惡業_一成_二應身佛_一念_二陀字_一時即滅_二四十二
 位根本無明煩惱_一二死苦果_一成_二法身佛_一。(惠心全
 集_二26₃上)

と云ひて得脱の要諦とせられ阿彌陀佛をもつて一切佛一切巧徳を攝せらるるを見るべく更に阿彌陀佛を法華經の本迹二門とせられて居る正修觀記中(全集_二26₂)かくの如く惠心僧都は天台天師が常行三昧中又觀經疏中に専ら阿彌陀佛を説かるるのは全く天台が依用するを得る佛として説かるゝに反して依馮せざるべからざる迄に其の信仰を高められた事は實に僧都の卓見なると共に僧都の獨特の觀念念佛が生ずる所以と云はなければならぬ。

惠心僧都壯年血氣の念佛即天台孝に心血を注がれた時代の念佛は正しく理觀の念佛であるが漸く自己に目覺めて來らた所謂中年の念佛は正し

く觀念佛にして善導流に近づかれた事を見る事が出来る、上人の自行念佛問答に十往生經の文を引きて

佛告_二阿難_一世間衆生不_レ得_二解脫_一何以故一切衆生由_二多_レ虛少_レ實無_二正念_一以_二是_レ因緣_一地獄者多。(惠心全集_二19₇下)

これに依つてこれを見れば捨此往彼の思想漸く多きを見るべく更に往要集開卷第一に曰く

夫往生極樂之教行濁世末代目_レ叫(中略)利智精進之人末_レ爲_レ難如_レ予頑魯之者豈敢矣是故依_二念佛一門_一云云。

と云へる試に其の厭離穢土、欣求淨土の明白なるを見るべく要素一部十門に分ち厭離穢土、欣求淨土より極樂證據、正修念佛、助念方法、別時念佛、念利益、念佛證據、往生諸業を上げ最後に問答料問せる然して第一に説いての六道苦患を述ぶる實に穢土の相自ら棘然たらざるを得ざるものにして實に台家の四土相即西方已心とは全く異れり。然して其の念佛は全く觀念の念佛と云ふべく其の正修念佛に阿彌陀佛の無見

頂相より足下千輻相に至るまで順逆反覆してこれを觀ざるものにして觀成就いて極めて明瞭なるに至らば諸罪消滅して往生を得ると主張せられて居るのである、又僧都の念佛は事理定散の諸行を説きて万機に逗會するものにして要集下本に曰く

明_二往生諸行_一者謂求_二極樂_一者不_三必專_二念佛_一
須_下明_三余行任_中各々樂欲_上。(全集二₁₅₉下)

と云ひ諸經文を引いて六度十三行を明して居る又助念方法に七行を上ぐるが如くなれ共ことごとく觀念往生を中心とせるものにして本尊觀一卷、阿彌陀佛白毫觀一卷は勿論、助念方法中所助五念門を觀念とせられたるを以ても最も其の觀念の念佛思想は明かなり。かくの如くなれば天台の念佛は横川の念佛に致りて其の根本精神が止觀なり極樂往生へ三諦觀は觀佛に移りしは注目すべきなり、而り而して過疫期の此の念佛は法然上人によりて大成されたる口稱の念佛を含むや又言をまたず又僧都自身も晚年稱名に傾き居られたと推思せらるるのである、その最も

明了なるは法語に曰く

人かすならぬ身のいやしきは菩提をねがふしるづなり。この故に人間に生る事を喜ぶべし。信心あさく共本願深きが故に頼まば必ず往生す念佛ものられ共唱ふれば必ず來迎にあづか巧徳莫大なり。(全集二₁)

と云へるを見れば其の稱名念佛思想の根強く胚胎せるを見るべく又要集の中に彼の有名なる念佛爲本の詞あり又念佛橙據に阿彌陀經の執持名號を明せる如き諸行と念佛とを對比して

其_レ行法因明_二彼法種々巧能_一其中自說_二往生之事_一不_レ如下直辨_二往生之要_一多云_中念佛_上何況佛自既言_レ當_レ念_レ我乎亦不_云云_三佛光明攝_二取餘行人_一。(惠心全二₁₂₉)

と言へる等其の稱名思想の歷然たるものありこの稱名思想が法然上人に依りて選擇されたるものと云ふ可きか。

法然上人の念佛は實に善導謫流念稱は一の念佛なるが其の依つて來る所は之を惠心僧都往生要に求めざるべからざるものは撰擇集拜讀初頭

に感ずる所たり、然して往生要集たるや前に見たるが如く觀念稱念雜然で諸師の説を引く又多くして取捨撰擇の標準不明確のきらひある難又免れず法然上人が求法の時に當りて最を思を止め苦心し玉ひしものは要集の取捨のいづれに依りてなさるべきかにあるならんとは獨斷の妄言と雖も一考の價值ある觀察なるべし然るに上人が要集所引の御疏に至りて一心專念彌陀名號の明斷に接し玉ひし時多年の凝雲一時に晴れ玉ひ感怍徹髓落涙千行の言葉自ら明らかなり、善導大師の順彼佛願稱名正行の明斷は法然上人をして撰擇集第十二章段に其の最大難關たる持戒菩提心、理觀三福修善を捨てて撰擇廢立して本願の一行に歸せしめ玉ひしものなり。

これを以て考ふれば惠心僧都に己に稱名の思怱を見出すと雖も未だ明了ならず、これをして明からに稱名の一行に歸し以て善導に返られしは正しく法然上人なりと云ふべし。

我國の淨土教は是の如くして天台の理觀の念佛より惠心僧都を中抽として淨土の稱名念佛に發

達せしと見るを得るなり、故に惠僧都は其の間者として又理觀、觀念、稱名と三つ階段を自ら一人の上に取りられしと吾人は見たのである、兎も角も天台の念佛をして淨土の念佛への一大革命は惠心僧都に依つてなされしものにしてむしろ法然上人は第二次革命者として又其の完成者と見るべきであらう。(完)